
側室物語

日暮

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

側室物語

【Nコード】

N3193T

【作者名】

日暮

【あらすじ】

王位争いも無事収まってよかったですね。え？ 私を側室に？別にいいですけど……変なことに私を巻き込まないでくださいね。あ、大丈夫です。自分で気をつけますから。

権力になんて興味がありませんだって面倒じゃありませんか的主人公が後宮内で上手に立ち回るお話。ふと思いつき書いているので、更新速度はとっても遅いと思われれます。

よくある「指摘のまとめ」

よく感想欄などで指摘されるので、まとめて注意書きとして挙げておきます。

よく指摘されること

?描写が少なくてキャラに感情移入出来ない

?文量が少ない

?腹黒い

?王子様涙目

?について。

この物語はあくまで「私欲全くなしの均衡と平穏を求める側室」というキャラと、「後宮をリアルに考えたら」を書きたいなと思っ
て書いていますので、登場人物が実際どんなキャラなのかはそこま
で深く描写していません。

サラッと読める、をコンセプトにしたら会話文や描写を入れられ
なくなったというのがあります。

主人公視点で進むお話なので、彼女があまり相手の容姿や人とな
りに興味がないというの関係しています。

?について。

正直に言いましょ。

力不s(ry

描写の削り過ぎが原因です。

無理に引き伸ばすとぐだぐだ感が出て、サラッと読めるといっても
ツトーに反するので。

?について

それについては主人公から抗議があるそうです。

主「再三言いますが黒いだなんて心外です。黒いというのは父のよ
うな方のことを言うんです」

ちなみに父は黒いを通り越して真っ黒、漆黒などと評判です。

?について。

今も恐らくこれからも扱いの軽い彼ですが、そのうち可哀相な目
にあいます。

誰かに恋焦がれてなのか、女の争いに巻き込まれてなのか、理由
は……ご想像にお任せします。

側室に選ばれました。

この度我が国の第一王子であられるリュシオン殿下が正式に立太子されました。

この吉事に、普段あまり王侯貴族階級とは関わりのない一般庶民達も諸手をあげて喜び、お祭り騒ぎが広がっています。

というのも、長い間第一王子派と第二王子派の間でどちらが次期国王になるかの争いが続き、庶民の間にもピリピリとした空気を肌で感じられるようになってきていたからです。

上層部の方では両殿下の筆頭後見人同士が顔を合わせても笑顔で嫌味という名の牽制を交わし合う程度で、何も知らない人は一見しても険悪な雰囲気すら感じられないくらいのものでした。

しかし派閥の末端まで行くと、まだ手に入れてもない権力を夢見て偉ぶるか、敵対派閥に対して子供かと言いたくなる程幼稚ないさかいを起こすような輩もいた程ですから。

上は体裁を繕えても、下の引き締めが出来ていない状態では被害を受けるのは一般庶民です。

庶民にとってはどちらが国王になっても大差はありません。

内乱が起こる程ではないにしろ、無用な争いは早く終わらせて欲しいという気持ちが一番強かったのは、王族でも中立派でもなく庶民だったのかもしれない。

ちなみに長らく王の頭を悩ませた王位争いですが、結構あっさりと決着が着きました。

というのも第二王子であるセシリス殿下の正妃は大国の王族出身で、彼女が嫁いで来た理由は話すと長くなるのでここではやめておきますが、その出身国で政変が起きたそうです。

ついでに第二王子派に属する官僚の不正が発覚したそうです。

しかも筆頭後見人である公爵の息子。ちなみにこの公爵とセシリス殿下の母君は兄妹。つまり不正官僚とセシリス殿下は従兄弟同士。

第二王子派にとってはまさに踏んだり蹴ったりです。

他国からの後押しは期待できず、身内からは失態を犯す者が出る始末。

第二王子派は弱体化は免れません。

肅正や追放を免れる為に選んだ手段は第一王子派に恭順を示すこと。

国の高官の間では地位の入れ代わりはあつたようですが、爵位を取り上げるなどの処置はなかつたようです。賢い選択をしましたね。表向きはですが、大きな不満もなく国が荒れることもなく王位争いが終わったのは喜ばしいことです。

ここまで事が滑らかに進むと思わず裏を考えてしまいますが、私は難しいことはわからないので知りません。

そういえば一時期父がいい仕事したぜ的な笑顔を見せていた時期があつたような気がします。きつと関係ないに違いありません。知らないっいたら知りません。

そして不本意ながら私にも関係のある話になりますが、正式に王太子となられたリュシオン殿下は後宮を開かれるそうです。

王太子妃たる正妃は既にいらっしやいますが、まだその間に御子はいらっしやいません。

お二人の仲が悪いという訳ではないので、せめて一人目が生まれるまで待つてあげるよと思わないでもないですが、まあこれも国の後継ぎの義務です。

国中の美姫をはべらすとは男の夢ですね。それに伴う苦勞を考えると全く羨ましくありませんが。

そして仮にも侯爵家の娘である私も側室として後宮に入れられるそうです。

父は私に無理強いをされる方ではありませんが、別に後宮入りが特段嫌というわけではないので断りませんでした。

いつかは誰かに嫁入りしなければいけませんし、それが次期国王だったというだけです。

正妃としてだったら別ですが。

というか父もそれを見越して話を持ってきました。断るつもりならそもそも縁談を会話にあげさせないという素晴らしい話の操り方をされる方ですから。

今回何故私を選ばれたかという和我が家は王位争いの最中にも中立派の筆頭でしたからね。

第一王子派出身のめぼしい令嬢達は、数人ですが既に後宮入りしたようですから。権力のバランスを図る為の処置でしょう。

中立派って日和見のどっちつかずという印象を持たれるかもしれませんが、権勢を損なわず中立を貫くってというのは実は一番難しいんですよ？

どちらかの派閥に偏ることなく要求を突っぱね、かつ必要以上に

恨みを買わないようにしなければならぬのですから。

我が家は権勢を損なうどころか、王位争いが終結した今では以前にも増して安定した地位を確立したとか。

その政治的手腕……我が父ながら惚れ惚れします。

しかし後宮ですか……暗澹とした権力争いが繰り広げられる女の戦場という印象が強いのですが。

父の顔を立てる為にリユシオン殿下にそこそこ気に入られつつ、妃殿下以下他の側室達から必要以上に恨みを買わないようにしなければなりません。

ああ、後宮内の派閥の一員と見られないようにも気をつけなければなりません。

仲良くしておいて損はない、味方ではないが敵ではない、こう思われるのがベストです。

ハア、面倒なことに巻き込まれないようにしなければなりませんね。

後宮に入るのも大変です。

リュシオン殿下の立太子後しばらく。

私はこれといった妨害もなく無事に後宮入りを果たしました。

え？ 展開が速い？

いや、だってそんな、その間にあった出来事なんて地味なものですよ？

後宮に連れていく侍女の選定や衣装や嫁入りに際し持ち込むものの手配、礼儀作法の復習、あとは後宮内の事情について父と話し合うくらいでしょうか。

他にも色々とありましたが、とりあえずはそれくらいです。細々としたことは他に任せました。

どの侍女を連れていくかはとても悩みました。後宮に入れば最も私に近い存在になるのですから、何よりも信頼の置ける者でなければなりません。

仕事ができる者がいいのは確かですが、重要なのは主を裏切らない者であることです。仕事の出来不出来はどうにでもなります。

一番いいのは私が生まれる前からついていてくれたマーサですが、彼女は屋敷を離れられません。近々我が家の侍女頭が引退するのでその後任を任せられるのが彼女くらいしかいないのです。

我が家の奥内に関して他家に比べやたら取り扱いの難しい仕事が多いらしいのです。何故か。

侍女の条件として、若すぎはいけません。会話の種に何を口に
していいのか悪いのか判断がつかず、気付かぬ内に情報を漏らして
しまつかもしれません。

身内に病弱であったり金に困っているものがいるのもあまりよく
ありません。身内に対する情は時に雇い主を裏切らせませす。

いくつかの条件で絞り人柄を見て、直接本人に意思を問うことで
ようやくと決まりました。

衣装に関しては採寸をしてあとはお任せです。

私は顔は整っている方と自負しておりますが、いかんせん華のな
い顔をしております。派手な服は似合いません。服に負けてしま
います。

ですので昔から大人しい色合いの布で、あまり飾りなどのない服
ばかり着ています。

私の好みを知っている馴染みの仕立て屋は、何も言わずとも毎度
流行を適度に取り入れ私に似合う衣装を仕立ててくれるのですから
いつも感心してしまします。

しかもそれを着ると大人っぽさがグッと二割は増すのですから不
思議です。

礼儀作法については任せて下さい。

宮中での作法は一風変わったものもありますが、完璧です。私は
生来取り繕うことに関しては自信があります。

どんな人でも指先のちよつとした仕種や歩き方だけで、人の抱く
印象はガラリと変わるんですよ？ 中身はどうであれ。

礼儀作法をしっかりと学ぶのは当然じゃないですか。

口に出すのは少し恥ずかしいことですが、閨の作法も上流貴族に
生まれた娘として修めています。実践は勿論まだですが。

父はいつもながらどこから仕入れてきたのかという情報をたっぱ

りと聞かせてくださいました。

妃殿下の好まれる香はという可愛いらしいものから、他に漏らしたら危険なものまで。

しかし私と同じく側室に入ったところこの娘さんは、実はその母親が身分の低い男と浮気して出来た子供で、娘さんもそれを小さな頃から母親に囁かれてきたものだから上昇意欲が強い、だとか。

娘さんの父親も知らないことだそうです、それを父は本当に一体どこから聞き付けてきたというのでしょうか。不思議ですね。ええとても。

今回側室に入った令嬢達は皆国内でも有数の名家出身です。お家騒動にもなりかねない秘密をそう簡単に教えないで欲しいものです。父は今回教えたことはお前の好きにしなさいと茶目っ気混じりの笑顔でしたが、父は私をなんだと思っているのでしょうか。

別にこれ以上の権力は特にいらさないから、後宮に入っても気にかげず好きに過ごせと言って下さったのは助かりますが。

さて、後宮ではのんびりと出来たらいいのですが……当分は無理ですね。

扱いなんてそんなものです。
(前書き)

短いですが場面が変わるので。

扱いなんでそんなものです。

ああ、話を戻しますね。

私は無事後宮入りを果たしました。

といつても正妃ではないので、厳粛な儀式なんかがあるわけでも、盛大な出迎えがあるわけでもありません。

入宮に先ん立ち用意された室に荷物を運び入れ、そこへ居を移す程度です。

宮中の下働きなんかでも事前に知っていなければ、入宮したことですら気付かないんじゃないかというくらいひっそりとしたものです。

お偉いさんが立ち会うなんてこともありません。

あ、ほったらかしにされた訳じゃありませんよ？ 作業にはちゃんと後宮側の方にも立ち会ってもらいました。

向こうから会いに来たお偉いさんといえば、全ての作業が終わった後に女官長が顔を出し、後宮内での注意事項を教えられたくらいです。

リュシオン殿下との顔合わせなんかも全くありません。女官長からは環境が変わって疲れているでしょうからしばらく殿下のお渡りはございませんとも言われました。

一斉に側室が増えたもんだから先が詰まってるんですね、わかります。

ええ、構いません。全くもって。うちは元々殿下の派閥じゃありませんでしたし。

どの部屋をどの順番で訪ねる必要があるのか悩まないといけない

とか、殿下の胸中お察しします。

ああ、あとは王太子妃殿下もしくは他の側室の方の手の者でしょうか。見慣れぬ（当然ですが）女官姿の者がそれとなく室の近くに立ち寄り、視線を寄越していました。

こちらにも都合が悪いので気付かないフリをしましたけど。

そのうち女官達の顔と、誰を主にしているかを覚えなければなりませんね。

誰が誰の味方も把握出来なければ、迂闊に動けなくなっちゃいますから。

とりあえずは今日は下準備だけして休みましょう。

明日は朝から動かなければなりませんからね。

上下確認は大切です。

さて。後宮に入ったからには、自分で自分の身は守らなければなりませんね。

早く動かなければ後々に響きます。

まずは侍女のニーナに王太子妃殿下のもとへお使いを頼みます。面会の申請です。お返事を貰ってくるところまでは期待していません。

この後宮はリュシオン殿下が立太子されてから開かれたもので、王后陛下は別の離宮にお住まいです。そのためリュシオン殿下の奥内に関しては必要以上に関知なさいません。

年若い王太子妃殿下だけで奥内の管理が出来るのでしょうか。それはまだわかりません。

気立てが良く聡明な方とはお聞きしていますが。

まあ妃殿下がこの後宮の主ということは確かなので……まずはお互いの立場を明らかにすることが肝要です。

ドレスの着用と髪の結び上げ、そして化粧が同時進行で進んでいくのに少しげんなりしていると、ニーナが戻ってきました。

後から時間を指定して呼ばれると思っていたのに、もうお返事を頂いてきたそうです。

……随分と思ったより早かったですね。

半刻程後に、だそうです。もしこれから準備をするのでしたら、少々時間が厳しいところですよ。妃殿下もその時間で呼ぶのでしたら、

もう身支度は完璧ということでしょう。

これは試されているのでしょうか、それとも恥を欠かせようとしているのでしょうか。

妃殿下の情報を修正する必要がありそうです。

まあまだ判断を下すのは尚早に過ぎますね。お会いしてから考えましょう。

妃殿下 エレノア様は私とは違った華やかな空気を放つ美しい方でした。

実のところお会いするのは初めてではありません。エレノア様が正式にリュシオン殿下と婚姻を交わす前は、それなりに社交界に顔を出していましたし、同じパーティーに出席したこともありませう。

ただ顔を合わせたことがあるくらいのことですから、落ち着いて会話をするのは初めてのことです。

幼いころから妃教育を受けてこられたのでしよう、いくつか言葉を交わしただけの会話からは知的さが、その堂々とした態度からは支配者階級独特の泰然としたものが感じ取れます。

これは期待できそうです。

今回はただ後宮入りしてすぐに王太子妃殿下の元へ挨拶に向かった、という事実が欲しかったのだけなので、さし障りのない程度の会話に留めました。

エレノア様も私の意図を理解されているのでしよう、始終にこやかにしておられました。

なかなか有意義な時間だったと思います。

さて侍女やメイドなどの使用人は私達が通る際は通路の脇に立ち頭を下げるのが慣例なのですが、遠くの通路からや私が通り過ぎた後などにちらちらとこちらへと視線を向けてくる者がいるのを数人感じます。

まあ貴族たるもの始終人に見られながら生活していますから、いまさら人目に晒されるのは気になりません。

むしろ今は私が妃殿下の部屋から出てきたという事実をしつかりと目に焼き付け主人のもとへ持って帰って頂きたいものです。もっともこれらは既に知っていた事実を確認しに出てきたのでしようが、いくつもの頭を下げられながら私室への道を進んでいると、なにやら進行方向上に不躰にこちらを見てくる女官がいます。

……はて、こちらの女官はどちらの方でしょう。

ニーナがこっそり耳打ちしてくれました。先日側室入りした公爵令嬢の侍女だそうです。

流石ニーナ、二日目で侍女の顔まで覚えているとは感心です。

ニーナは今回連れてきた者の中で、マーサも推す最も優秀な者です。仕事面は然ることながら、貴族間の情報にも聡いので助かります。

なにやら形式的にお辞儀をされ、話を聞いてみると、

私が後宮にお入りになったのは聞いていたが、明けてすぐ朝早くから妃殿下に面会するよう出かけたのには驚いた、まずはこちらに顔を出して頂ければ妃殿下に失礼がないよう後宮のことを教えて差し上げましたのに、というのが公爵令嬢のお言葉だそうです。

ふむふむ。

ああ、エレノア様は確か侯爵家の出でしたね。だからこの侍女の仕えている公爵令嬢は、妃殿下に挨拶するのなら自分のところにも顔を出せ、むしろ真つ先に来い、と。そうおっしゃりたいわけですね？

……エレノア様もこの先苦勞なさりそうですね。

とりあえずは、これから先長い付き合いになるでしょうからお茶を共にするというのもやぶさかではありませんが、王太子妃殿下が近々後宮中の方を集めてお茶会を開かれるらしいので、そこで顔合わせしましょうということを柔らかくお伝えしました。

まあつまりは、エレノア様主催のお茶会に御呼ばれして上下関係をきっちり理解しろ、と含ませたのですが、きちんと理解していただけるでしょうか。

妃殿下相手ならまだしも……私、他の側室方より下というわけはありませんし。あくまで対等なんです。現段階は、ですけど。父が爵位関係なくしつかりした地盤を築いて下さったおかげで、必要以上に遜らなくて済んでよかったです。

あ、父の笠を借りるつもりはないですよ？
ちよつと身を守るのに使わせて頂いてるだけです。

ただエレノア様は大丈夫だと思いますが、他の側室方がしつかりと相手の地力を理解していない場合もあるので、その場合は自分で対処しなければなりません。

そういった方がリュシオン殿下に気に入られちゃったりしたらもう最悪です。

ふむ……まずはお茶会で、エレノア様の力量でも見せていただき

まじょうか。

笑顔を忘れてはいけません。

エレノア様主催のお茶会へと招待されました。

後宮では新しい住人が増えた際、その後宮の主がお茶会へ招くというのが慣例です。

表向きの理由としては、早く後宮に馴染める馴染めるようにという気遣い。

実際のところは、正妃側が側室を招くという形式を取ることによって下関係をしらしめるといったところですよ。

お茶会の場で互いの格の差というものをどれだけ見せ付けられるかが、主催者側の力の見せ所というものでしょう。

お茶会に向けてドレスを選ぶのは侍女達です。衣装部屋からいくつものドレスを出してきて私の体にあてては楽しそうにしています。貴族の女は着飾るのも仕事の内ですが、今回の主役はエレノア様です。あまり着飾り過ぎてはいけません。

屋敷から持って来る際に、お茶会用のドレスは決めておいた筈ですが、ここはただでさえ娯楽の少ない後宮です。徒に侍女の楽しみを取り上げる必要はないかと思い、指摘するのはやめました。ドレスの着脱を繰り返すのは非常に体力を使いましたが。

私は普段からあまり派手な装いはしませんが、今回のお茶会はこれからの生活においてとても重要なものになります。下手な装いは出来ません。

シンプルなドレスに、小さいながらも存在感のある装飾品で上品に仕上げるのがいい……というのが試着会を経た侍女達の一致意見です。

決まってよかったです。

お茶会に集まったのは豪華極まりない顔ぶれでした。

生家の権勢も然ることながら、社交界で名を馳せた方が何人もいます。

国中の名家のご令嬢達ですから。お金がかかっています。

人の美しさというものは顔立ちではありません。どれだけ美容に気を使うかで変わるものです。

これでどれだけ中身に気を使われてる方がいらっしやるかが気になるところです。

権力が伴うと、人は何をするかわかりませんからね。

お茶会は皆さん表面的には終始にこやかでした。いきなり礼を失するような迂闊な方がいらっしやらないようで安心します。

空気に吞まれてしゃばれなかったというのもあるかもしれませ
ん。

エレノア様の華やかさと、場を取り持つ力は流石です。間違いないあの場の支配者は彼女でした。

側室の面々に後宮の主として印象付けられたのは、王太子妃殿下としては大きかったと思います。

私はというと、積極的に会話に興じるということはありませんでしたが、あまり会話に参加しないというのも失礼ですし、組み易しと見られるのも今後にとって都合の悪いことです。

会話を求められれば返しましたし、ここぞというところでは話題を提供致しました。

どのような話題についていくかでその方々が何に興味を示し、知識を得ているかがわかります。

どのような話題にも深い知識を示すエレノア様。流行に関する話から少々政治に触れる話まで。感心します。日々勉強されているのでしょうか。

反対に政治に触れる話に入ると途端に口数が少なくなったり、噂話程度の知識しか持ってらっしゃらない方もいらっしゃいました。

まあ貴族の娘にとっては必要のない知識でもありますからね。嫁ぐ家によっては小賢しいと嫌がられる場合もありますし。

王の妃としてなら必須ですから、この先万が一エレノア様がお亡くなりになられたとしてもその後任には難しいと思います。

まあエレノア様が賢明な妃であられる限り亡くなられることはないでしょう。ただの病気は防げませんがね。

勿論流行に関することは皆さんこの国で一番詳しいので、全員が会話に参加していました。

美容に関する話題が一番盛り上がったのは……この環境では仕方のないことです。

お茶会の中でよくよく観察していると、エレノア様に支配された場でも気になる方は数人いらっしゃいました。

話題を積極的に提供されるあちらのルンベンドルク公爵令嬢は、ご自分に自信があるのでしよう。

ああ、そういえば先日廊下で声をかけてきた侍女の主でしたね。要注意です。

他の側室が苦手そうにしている話題をそれとなく向けているニゼット侯爵令嬢はわかっていてやっています。

ああ、あの令嬢は父が言っていた例の……。間違いなく要注意です。

あと余裕さを醸し出していた方々は、まだ手付かずの側室がいる中でのお手付きの自信でしょうか。

皇太子殿下は政治というものを理解していらっしゃるので、近々全員回られると思います。

逆に大人し過ぎる方もいらっしゃるのです。そちらも気になるところです。

皆さん何を考えて後宮に入られたのか深くまではわかりませんが、人となりはわかったつもりです。

あとはエレノア様がどうお考えなのか聞けたらいいのですが……まだそこまでの関係ではありませんね。現段階では必要ありません。

本音を笑顔で覆い隠す方々が多くて困りますね。

あ、私もでした。

笑顔を忘れてはいけません。(後書き)

妃殿下ハイスペック。

そして主人公は表には出さないがサラッと毒を吐く。

よつやっと来ましたか。(前書き)

題名からして主人公からの扱いが軽い人。

よつやっと来ましたか。

女官長から通達がありました。

王太子殿下が今夜お渡りになるそうです。

ニーナ達に日々情報を集めさせていたところ、今のところ殿下のお渡りがあった側室は四名だとか。

ルンベンダルク公爵令嬢、ニーゼット侯爵令嬢、モルト侯爵令嬢、コランダム伯爵令嬢。

父親はそれぞれリュシオン殿下の筆頭後見人、財務大臣、北の国境守護、南の大穀倉地帯の領主、ですか。

その豪華な顔触れの次点に私とは、意外に早かったという驚きも、そんなものかという納得もあります。

私の父侯爵が自分側の派閥ではなくとも、宮廷において無視出来ない力を持っていると考えられているでしょう。相当味方に付けたがってるのが見えるようです。

いえむしろ敵に回したくない、でしょうか。

……父は宮廷で一体何をしているのでしょうか。

しかし殿下がお渡りになると聞いてから、私付きの侍女達が非常に生き生きとしています。

湯浴みをして、香油で髪を梳いて、香を焚きしめて……とはしゃいでいます。

あの、殿下が来られるのは夜ですよ？ お相手するのは私ですよ？

きつと夜リユシオン殿下にお会いする時には、『私』という作品が出来上がっているに違いありません。

朝からそこまで気合いを入れなくても、と思わずにはいられません。

さて、夜に向けて着飾るのも大切ですが、それよりも気をつけなければなりません。

他の侍女がはしゃいでいる中、ニーナに目配せすると、流石彼女は優秀です。

侍女達を窘め、普段と同様の仕事と夜に向けての手配を指示して動かしました。

ニーナを残したのは、これからの他の側室方の出方に関して話す為です。

お手付きとなれば側室は正妃との格の違いはあれど、正式にリユシオン殿下の妻の一人となります。

エレノア様に御子がいらっしやらない今、男児を産めば、次代の王の母をも望める立場になるのです。

後宮内が静かに荒れるとすればこれからでしょう。

そして他の女達を蹴落とす為に、愚かしい手に出る者も出てくるでしょう。

エレノア様はおそらくないでしょう。彼女は妃というものをよく理解しておいでです。

ルンベンドルク公爵令嬢はプライドが高そうですので、先日の廊下でのことを考えると怪しいですが、私より先に殿下のお渡りがあった現時点ではないと考えていいでしょう。

考えたくはありませんが、お茶会での様子を見る限り、二一ゼツト侯爵令嬢あたりならあるかもしれません。

標的にされるようなことをした覚えはないので、現時点では一応様子を見るといったところでしょうか。

他の方々もこれからどうなるかわかりません。権力と恋情で人はどんな行動に出るかかわからなくなりますから。

現在二一ナを始め侍女達には、他の側室付きの侍女の行動を調べたり、下働きの者の噂話を拾い上げたりと、後宮内での独自の情報網を構築させている最中です。

下働きの者の中には何が重要な情報なのかわからず口に出す者もいますので、上手く話に乗せて聞き出すと大きな情報源となるのです。

今は後宮に入ってあまり日が経っていないので穴もありませんが、そのうち大きな力となるでしょう。

そして。

普段より二倍も三倍も気合いを入れて磨き上げられた身支度を終え、夜。

といつてもそこまで遅い時間ではありません。

扉の向こうから先触れがあり、とつとつリュシオン殿下が来られました。

作法として教えられた礼をして迎えます。

夕飯はもうとつていらつしやるので、長椅子に案内し、用意しておいた酒をすすめます。殿下は一杯、二杯と杯を傾けられ、私は空になったそれに注ぎます。

これはもう儀式のようなものです。

殿下側が望んで召し上げたのではなく、これまでろくに面識のなかった者同士です。情を芽生えさすには圧倒的に時間が足りません。形式的に言葉を交わし、ではそろそろ……となるわけです。

なりました。

あ、

え？

こ、こんなことも？

……………っ

初めては痛いと言われてきましたが、意地でも口には出

しませんでした。

リュシオン殿下は全てを終えぐったりとした私を労って下さいましたが、御自分の身支度を整えるとすぐに戻っていかれました。

そんなものです。例え後宮を回られても、睡眠はご自分の居室で取られますよ。安心して眠れないじゃないですか。

むしろ今の状態で長居されたら私が困ります。疲れてるんです。

なんとというか、その、実際体験してみないとわからないものですね。

そうして殿下が帰られてから、寝台と体を清め、事前に用意しておいた薬を飲み、

明日からの日々を思って眠りにつきました。

もう当分いらっしやらないでいい、と立場を忘れてちよっただけ考えたのは秘密です。

ちよっただけですよ。

ようやっと来ましたか。(後書き)

側室側室とややこしくなるので、登場人物に名前を付けました。主人公と父の名前が登場してないのはわざとです。

お花畑の出会いです。

後宮は閉鎖的な空間で、後宮に立ち入るには家族であつても許可がいきます。

備え付けの施設も少ないですし、それらが後宮には娯楽が少ないという結果に繋がります。

ですので令嬢によってはどのように暇を潰すかが悩みの種であり、その手段は人それぞれに異なります。

強力な財力を持ち、社交的な令嬢によっては、頻繁にお茶会を開いたり、御用商人や仕立て屋を頻繁に招いては身の回りの物を新調したりして日々を過ごす方もいらっしゃいます。

お茶会を開く方は主に派閥作りをする為ですね。人によっては純粹に話し好きという場合もありますが。

頻繁に開けるといふことはつまり財力があり、ひいては実家の権勢が強いということです。

ちなみにルンベンドルク公爵令嬢がこの傾向にあたります。私も早速一度招待されたので参加しました。

商人の御用聞きは、この閉鎖的な後宮において流行の物に触れることの出来る数少ない機会です。

女としての魅力を磨く為にも疎かには出来ません。侍女も喜びます。

目新しいものを揃えることで目立つことも出来ます。

ニーゼット侯爵令嬢にこの傾向が強く見られるようです。生まれに関係しているのかもしれませんが。

私はというと、することがない、という意味の暇はあまりありませんが、実家では書物を読むのを好んでいました。種類はこだわりません。雑多です。

書物を揃えるのはお金がかかりますが、実家には小さいながらも書庫がありましたので、勉強がてらよく通ったものです。

しかし残念ながら後宮にはそういった書庫がありません。もう一度言いますがお金がかかりますから。側室には必要ありませんし。

宮廷の方にはその場所柄大きいものがあるらしいのですが、私達は立ち入りを禁じられています。そのうち本の貸し出しを願い出るつもりです。

ですので、実家から本を差し入れてもらっているのが現状ですね。

今日は気分を変えて外の庭園で本を読むことにしました。

天気がいいですし、日に当たらない生活は体に悪いと言われていますし。

指先まで覆うドレスを着せられ、侍女が日傘を翳すなど、日焼け対策はばっちりとされましたが。四半刻程で部屋に戻るようと再三言われましたが。

美容に気を配るのは側室としての義務ですよ。はい。

庭園では一人静かに過ごせると思っていたのですが、どうもそうはいかないようです。

あ、一人とは言いましたが侍女は数には数えませんが、常に私付きの者が着いています。

同様に他の側室方も常に侍女を連れていきます。

そして庭園の中に何やら見慣れぬ侍女が。

どうやら他にどなたか側室がいらっしやるようです。

あ、流石ニーナ、仕事が早いです。耳打ちしてくれました。リュ
ーベック伯爵令嬢付きの侍女だそうです。

リューベック伯爵令嬢ですか……。確かエレノア様のお茶会でニ
ーゼット侯爵令嬢の標的にされていた方ですね。

まだお若くていらっしやって、どこか幼さの残る顔立ちの可愛ら
しい方です。あまりお話したことはありません。

庭園で鉢合わせては落ち着いて本を読むことも出来ません。そこ
まで繋ぎを作る必要もなさそうな方です。

さてどうしましょうかと悩んでいると、あちら方に気付かれてし
まったようです。

お茶しませんかと誘われてしまいました。

予定が崩れてしまいましたね。

案内された先には綺麗に整えられた花壇に囲まれ、リューベック
伯爵令嬢が備え付けのテーブルについていらっしやいました。

侍女がお茶の準備をしています。

向かい合いお話をしてみると、リューベック伯爵令嬢はこの庭園
の花壇が特にお気に入り、よく外に出ては眺めているのだとか。
それは知っていましたが、時間は一定にして頂けませんか。

植物の種類にも詳しく、既に後宮の庭師とも顔見知りになってし

まったそうです。

「ご実家ではよく花壇の手入れをしていたそうなので、その延長でしよう。」

貴族の娘にとっては花壇は世話するものではなく眺めるものなので、あまり褒められた趣味ではありません。

後宮ではその趣味は隠されているようなので、眺めるまでが限界でしょう。

社交界に出るのも緊張してしまい、そのまま後宮入りしたそうでお茶会に招待されても気後れしてしまうそうです。

私は読書の趣味が高じてリユーベック伯爵令嬢に及ばないながらも植物の知識を持っていたので、久しぶりに気疲れせず話が出来たと嬉しそうにされていました。

そしてもうとっくに四半刻を過ぎた頃、リユーベック伯爵令嬢は何やら俯いてもじもじとされました。

「ご不浄ならどうぞ遠慮なさらず。聞きたいことがあるならどうぞ。」

え？ 殿下のお渡りの時の様子を教えて欲しい？

なかなか大胆なことを聞く方だと思いました。

そういえばこの方にはまだ殿下のお渡りがありませんでした。

初夜の行為を聞くなんて、この目の前の純朴そうな令嬢の認識を変え……あ、違う？

あ、はい、そうですよね、殿下のお人柄についてですよ。

当たり障りなくお伝えしておきました。

何やら殿下に淡い憧れを抱いていらっしやっただようなので。

しかしリユーベック伯爵令嬢ですか……。

後宮で私が一番苦手にするのは、ルンベンドルク公爵令嬢でもなく、ニーゼット侯爵令嬢でもなく、彼女がもしれません。

なんだか、とても……疲れました。

お花畑の出会いです。(後書き)

お花畑との出会いです。

普通なら主人公はこっち。

子供は授かり物ですよね？

ようやくリュシオン殿下が全ての側室の元を回られたようです。

思ったより時間がかかりましたね。

どこにも渡られずに休まれる日もありましたし、側室を回られる間にもエレノア様の所へも渡られていたようですから。

妻を大切にすって素敵ですね。私達側室も妻ですけど。

さて、これで殿下は最低限の義理と役目は果たしたことになります。す。

運が良ければ、いえ悪ければですか？ この一回で妊娠した側室がいるかもしれませんし、そうなれば殿下にとっては第一子です。

男児ならばそのまま第一王子の母として実権を握れますし、女兒であっても王の子を産んだ女として後宮での地位は確立できます。臣下へ下げ渡される確率も減るでしょう。

もっともそうなればエレノア様に未だ御子がいらっしやらないことから、リュシオン殿下の次代の王太子を決める際にいらぬ火種を残すことになりましたが。

特にルンベンドルク公爵令嬢でしたら、父親はリュシオン殿下の筆頭後見人で国内でも最盛を誇るとも言える家ですから、王子を産めば当然その子は次の王太子への有力候補になります。

エレノア様に王子が産まれていなかった場合は、権力的にはそれでも大きな問題にはならないのですが。

ルンベンドルク公爵令嬢は気位が高く気性の荒いところのある方

ですが、エレノア様同様高い教養を備えていらつしやいますし。
あ、あくまでエレノア様に先に王子が産まれていなかった場合は、
ですよ？ 後からエレノア様が懐妊しようものならまたややこしく
なりますね。

また、ニーゼット侯爵令嬢は別の意味で厄介そうです。

彼女に王子が出来た場合、何を要求されるかわかりません。

自分の子の立太子を望むかもしれませんが、後宮での地位向上を
望むのは当然として、王太子妃の地位まで狙うかもしれません。

ルンベンダルク公爵令嬢とは違い自分を律することの出来ない方
ですから、際限なく求めるかもしれません。

あ、リユーベック伯爵令嬢になら子供が出来ても大丈夫そうです。
とても愛情深く育てそうですし、王位を望むようなことはないでし
ょう。

あつたとしても潰されてしまいそうです。

え？ 私ですか？

出来ません。薬飲んでますから。

一番いいのはエレノア様に今すぐ御子が出来ることなんです。
立て続けに男の子を二人程産んでいただければ言うことなしです。
それからなら誰が何人産もうとやかやく言いません。国庫を圧迫
しない程度にお願いします。

エレノア様の御子が王位を継ぐのに相応しく育つ限り、争いも起
きません。起こさせません。

今度エレノア様の元へ滋養にいいものをお送りしましょうか。

そんな私の憂いを見計らったかのように、父から手紙が来ました。誰かに見られてもいいように、一見するとただの家族間でやりとりする文章ではありますが、その実一定の法則で読むと別の情報が読み取れるようになっていきます。

我が家では、というより我が家独自の暗号でよく使用されますが、とても高度な手法です。

私はこれを父程上手に書き上げられません。元の文章に裏の情報を違和感なく練り込むには、とても頭を使います。

ええと、なんでしょう、

側室の父親側を抑えたから大丈夫、子供はしばらく出来ないようにしている。心配するな？

……………。

……父は本当に宮廷では何をしているのでしょうか。
それに、出来ないようにしているって……………。

これ以上考えないようにしましょう。

子供は授かり物ですよね？（後書き）

父怖い。手紙書く時もきつと笑顔。

慶ばしい報せです。(前書き)

短いです。

慶ばしい報せです。

父から不穏な手紙を受け取ってから早幾月。

頻度の差はあれど、どの側室方の元にも再度のリュシオン殿下のお渡りがありました。

頻度の差があるといえども、まだ格別の寵愛を受けていらっしゃる方はいません。

機嫌を損ねたら厄介な方へ、ご機嫌取りの為部屋へ寄るといった程度の差です。

そして、そのいずれの方々にも未だ懐妊の報せはありません。

側室方によっては、自分が妊娠しないことに人知れず焦りを見せたり、他の側室は既に懐妊しているのではないのかと疑心暗鬼になつていたりする方もいらっしゃいます。

恐らく父は側室方に避妊薬なりなんなりを仕込んでいるのでしようが、どういった手段を用いれば本人に気付かせず仕込むことが出来るのか。

それぞれの実家の協力を経てなのでしょうが……。

何かに気付かれたのか、エレノア様からは先日お茶会へ招かれた際にそれとなくチクリと釘を刺されました。

私に言わないで下さい。私は知りませんから。

私もこれでも心苦しいんです。

……本当ですよ？

そして、とうとう！
待ち望んでいた情報を手に入れました。

エレノア様懐妊、です。

おめでたいことです、実に。
これで男の子だったら言うことありません。

すぐにもお祝いの言葉を贈りたいところですが、実のところつい先程医者による診察で判明したばかりで、まだ公表されていません。

リュシオン殿下の元へは既に伝えられたのでしようが、未だ公となっていないのは殿下の裁量を待っていらっしやるからなのでしょう。

何故私がそんな重要な秘密をこれ程早く知っているかというと、誰かに聞き出したというわけではありません。

エレノア様付きの侍女も後宮付きの侍医も、それほど口が軽くては職務は務まりません。

つい先日ニーナが、エレノア様の侍女が少々様子がおかしかったところを見掛けたと言っていたのでピンとききました。その勅に従いエレノア様の周囲に注意を払っていたのです。

エレノア様が口になさる食材を流通面で調べたり、密かに侍医が部屋へ招かれるのを目撃したり、部屋からリュシオン殿下の元へ密使が走ったり、といった情報を組み合わせ、今回判明した訳です。

裏も取りました。

小さい情報すら見落とさない観察力と鼻のよさ。
我が家の侍女達は実に優秀ですね。

さて、エレノア様懐妊の報せが公になれば、しばらくは祝いの空
気で一色となるでしょう。少なくとも表向きは。

リュシオン殿下もエレノア様へ配慮して、側室の元へ通うのも控
えられるでしょう。

しかしその先は父が交渉した休戦協定が切れてしまいます。

エレノア様のお腹の子が、男の子でありますように。

おめでたいことは祝いましょう。

エレノア様の懐妊が正式に公表されました。

懐妊の発覚から公表まで、しばらく日があけられました。医者や信頼のおける女官の手配などを行っていたのでしよう。

正妃の初の懐妊に万全の体制をとるという意気込みが見られます。

公表までに頻繁にエレノア様のもとを訪ねられるようになったりユシオン殿下や女官達の動きに疑問を持った側室方もいらつしやうたようですが、事実を突き止めるにまでは至らなかったようです。

私はとうに知っていたので、女官長がエレノア様付きの女官を連れて部屋を訪ねてきた時、ちゃんと少し驚いた顔をした後に笑顔でお祝いの言葉をお送りしました。

私は心からお祝い申し上げていますから。小耳に挟んだことが、他の、ルンベンドルク公爵令嬢やニーゼット侯爵令嬢あたりは悔しそうな顔を隠していたそうです。

前者は先に子供を産むことかなり高い確率で正妃の座を狙える立場だからこそ特に悔しいのでしょう。

どうしてもエレノア様より先に妊娠は出来る筈がなかったのですかね。

さて、今までは控えていましたが、せっかく公表されたのですから今度お祝いの品をお贈りしましょうか。

口に入れるものは時期も時期ですから避けた方が無難ですね。お食事などには気をつけていらつしやうと思えますし。

万が一私が贈ったもので体調を崩されたりしたら目もあてられま

せん。

安産祈願は気が早すぎるでしょうか。

家によつては男の子が生まれるように祈祷させるところもありますが、これは国の後継ぎ問題に直接関わる繊細な事項です。そんな事柄に一側室が手を出していいものではありません。

反対に女兒が生まれるように祈祷していたのだと難癖つけられたら大変ですし。

そもそも祈祷の結果を見る限り生まれる男女の数は半々なので、あまり効果は期待出来ないと私は思っています。

祈祷の効果がないからといって処罰される方が可哀相になりますよね。

ここは無難に本でも取り寄せて、と考えていたら二ーナに非常識ですと止められました。

……そういえばそうでした。

私は普段から本を読むのが好きですし、エレノア様とはいつも打てば響く会話を楽しんでいるのでうっかり忘れていたようです。

女性が表立つて学を嗜むのはあまり歓迎されません。後宮に本がなくわざわざ実家から本を取り寄せているのもそれが理由ですし。

エレノア様もあの知識量から考えて相当の本を読み込んでいらっしやると思うのですが、王太子妃殿下への妊娠のお祝いに本を贈るのは確かに非常識でした。

仕方がないので安眠に効果のある香を贈りました。無難です。

しかしエレノア様が懐妊なさったことで、これからは他の側室方にも御子を授かる可能性が出てきました。

夫の浮気は妻の妊娠時に起こるといいますし……。

まあ私達は側室という殿下の妻の一人なので浮気という言い方は正しくありませんが。

殿下をお慰めする為に私達は存在しているのですから、正妃が夜の相手を務められない今、私達側室が当面の夜の相手を務めるのは当然。

正妃の第一子妊娠中に他の方を妊娠させるといった事態は避けていただきたいものです。

せめて、そう、お相手を選んでいただければ。

あと父に聞いたことですが、動きは後宮の中だけではないようです。

宮廷でも表向きエレノア様の懐妊に皆一様にお祝いの声をあげているようですが、そこは皆さん、より上を目指す方々。

後宮に入っているご令嬢のお父上方は協定の解除を悟り、水面下で動き出そうとしているようです。

今後の為にも第一子には男の子が生まれて欲しいものです。

おめでとうございます。 (後書き)

殿下の名前をたまに忘れます。リュ・シウォンの劣化版みたいな

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3193t/>

側室物語

2011年6月21日13時35分発行